

平成26年度下期建築物防災週間関連行事

建築物防災講演会

講演記録

テーマ：「あの日そして今 ～震災体験と今考えること～」

講師：語り部KOBEL995 代表 田村 勝太郎 氏

日時：平成27年3月5日（木）

午後1時50分～3時40分

場所：建設交流館 グリーンホール

主催：一般財団法人 大阪建築防災センター

ごあいさつ

大阪建築防災センターでは、平成26年度下期の建築物防災週間の関連事業として、去る3月5日に防災講演会を開催しました。

この講演会は、毎年度9月と3月の2回、防災意識の向上と建築物の防災対策を促進するために、当財団の公益目的事業として長年に渡り実施しております。この間、地震、火災、風水害など建築物を取り巻く様々な災害を取り上げ、多くの専門家の皆様から貴重なご講演をいただきました。

今年は阪神・淡路大震災の発生から20年目の年です。そこで、震災を体験し、避難所運営や避難者サポートに携わっておられた語り部KOBEL995代表の田村様に、「あの日そして今―震災体験と今考えること―」をご講演いただきました。

貴重なご講演の内容をより多くの方々にお伝えしようと、このような冊子にまとめました。皆様の防災意識をさらに高め、命の大切さや災害への備え、人と人とのつながりの大切さなどを、改めて考えていただくきっかけにしていたければ幸いです。

当財団としましては、今後とも建築や市街地の防災対策に貢献できるように一層の尽力を傾けてまいりますので、引き続き皆様のご指導、ご協力をよろしくお願いいたします。

平成27年4月

一般財団法人 大阪建築防災センター

理事長 吉田敏昭

平成26年度下期建築物防災週間関連行事
建築物防災講演会

テーマ： あの日そして今 ―震災体験と今考えること―

講師： 語り部KOBÉ1995 代表 田村 勝太郎氏

日時：平成27年3月5日（木）午後1時50分～3時40分

初めに、あの当時の映像を3分程度見ていただけたらと思いますので、よろしくお願いします。

映像放映

幸せ運ぼうより「あの日あの時」

語り部KOBÉ1995の田村です。

今から、ああいう状態の中で、どういふふうな暮らしをして、どういふふうな活動をしてきたかという体験を話させていただきます。

家の倒壊と脱出・母の救出

当時、私は、53歳で芦屋市に住んでいました。神戸市と20メートルぐらいのすぐ近くで、先ほどの映像の中で高速道路が倒れていたところから5分ぐらいのところ。80歳の母親と同居しておりまして、神戸市の小学校の教師をしていました。

ちょうど家が揺れ始めたときというのは3連休の後で、もうそろそろ起きて朝の準備をしようかなというふうなことでうつらうつらと目が覚めかけたところです。家が揺れてきたので、私は木造の2階で寝てい

て、母親は1階で寝ていたわけです。それで、私は、地震や、こたつに潜れと2階から言うと、母親はわかったということで、もう終わるかなと思えば今度は家が縦に揺れ始めて、ほぞが抜けていくあの怖さは今でも何かぞっとしますね。木造ですからほぞが抜けて、またきっちり入らずに、かちっというふうに木の乾いた音がかちかちというふうにするわけです、見ていますと。2階に上がってくるその階段がねじれて裂けていく。ぼろ家でしたけれども、階段自身はやっぱり体重を支えるのに大きな太い木が使われているわけですが、すごい音。周りにあるものは全部潰れていく。本当にもう何か俺の人生は終わったと思って布団の中で縮こまっていた。はっと気がついて、下に親がおると思って、大丈夫かと声をかけたら、下から大丈夫、そうするとドンというすごい音ともに、まだ夜が明けていなかったわけですが、かび臭いにおいが辺りにぷんとしてきた。もう階段が潰れているし、外へ出なければいけないと思って立ったところ、畳の上をずっとアイススケートを滑るように滑っていくんです、自分の体が。ああ、これは大変やなと思って、布団が欲しかったんですけども、探したら毛布を1枚だけ手につかんだので、

それを持ってちょうど上の窓のあたりから怪我をしないようにそこに敷いて自分が外に出ました。出て、外から自分の親に大丈夫かと声をかけたら、大丈夫と、ああ、生きとるな。同じような家が二、三軒並んでいたわけで、その隣に二十歳前後の若い男の子の兄弟のいる家がありまして、2人が飛び出てきて私の傍にいるわけです。お母さんと呼ばせたら、「おかん、大丈夫か」と、中からお母さんが「大丈夫、足に何か乗っかかっている」と言って、ああ、生きとるなと思って、けれども3人ともそこでなすべき事が何もしないでどうしようと考え込んでいた。下のほうの弟、19歳だったんですけども、「けんちゃん、ちょっと消防署まで行ってくれ」と私が言いました。ふだんでも歩いて七、八分のところに阪神の芦屋駅があって、そこに消防署があったものですから、お兄ちゃんは、はだしで走って行って戻ってきて、「おっちゃん、あかん、消防署の人が自分らで何とかしてくれと言っている」。その一言というのは、自分はこういう我が家しか見ていないわけですけども、そういう大きな被害は町全体を覆っているということで本当に絶望的になりました。どうやって助けたらいいか。それで、3人はうろうろとしていて、体感時間では2時間ぐらいの感じですけども、実際はどの程度だったでしょうね。

夜が明けてきて、近所の人だんだん出てくるという。近くに天理教の教会があって、そんなに親しくはなかったんですけども、話ぐらいする間柄の若いお兄さんで、30歳前後の兄弟がいて、出てきて、どうしたと言うから、親が埋まっていると言ったら、家に帰って行って何か道具を持って

きてくれました。行こうかということで、一番端っこのあたりから私と一緒に3人で潜って行って、いろんなものをのけながら、こたつの中から母親を引っ張り出して、背中におんぶして出てきたわけです。母親が背中であめいとるんです。「あんたが早いこと助けてくれへんから、おしっこちびったやないか」。長い時間、寒い中にいたわけでしょうね。助かった親子の喜びの会話でもあったわけですけども。隣のおばちゃんも助けて、そうすると、そこを曲がったところにサトウさんというおうちがあって、どうぞ寒いから入りなさいということに入れてもらったんですけども、私は何か落ちつかなくて外へ出てみると、向こうのほうでおやじと叫んでいるんです、同じくらいの年の人が。行ってみるとそこではもうモルタルの3階が2階になっていて、多分1階でお父さんが寝ておられたんでしょうね。そこへ入っていきおうとする足を娘さんと奥さんが、あんた、やめてとか、お父ちゃんやめてと何回も繰り返されるんです。けど、私はそこにいても何もできない。また、こっちへ帰ってくると、違う方向から、おばあちゃんがいなくて高校生の女の子が走り回っていて、そこへ駆けつけて行って、立派なおうちでした、2階建ての。家は潰れていないんです。それで、どうしたと言ったら、「おばちゃん、2階で寝ているけども、階段が潰れて上がられへんや」。しょうがないからどこと言ったら、あそこということで、少し土の壁が割れているところを落ちていた木切れでそこに穴をあけて、たまたまおばあちゃんの頭があったわけですけども、引っ張ってもたたいてもまだ温かかったですけども応答なしと

いうことで、どうしようと思っていたら、下ではあかんと言ったら、お孫さんですね、寒い道にひれふしてわんわん泣いていました。たまたま自転車に乗ったお巡りさんが通りかかったのでわけを言うと、後は私が何とかしておきますよということでその場を離れました。

初期の避難所

また戻って、母親を今度連れて、避難所になっている精道小学校に行こうということで、母親を連れていく。そうすると、その家の方は、お母さんにどうぞということで、布団の一流れ、上下のワンセットをくださいました。ありがとうございますということで手をつないで学校まで行きました。学校は本当にいっぱい、1階も2階も3階も、4階まで上がりまして、そうすると、物置のような4年生研究室と書いてあって、入ってみると、図工とかいろんな材料置き場で新聞があったり、割り箸が入れてあったり、紙コップがあったりとか、いろんなものが置いてあったわけですが、そこに四、五人入っていたので、あいているところに母親を入れて、ダンボールを探しに言って拾ってそこに敷いて、布団を敷いて母親を寝かしたわけです。考えてみると、ああ、水が要るな。たまたまそこには子供たちがビニールの袋を置いていたので、こんな小さな袋を2枚もらうねと黙ってもらって、すぐ近くによくうどんやすしを食べにいくお店があったので、そこまで行って、おばちゃん、水をおくれということで2つにもらって戻ってきて、子供の机のこういうフックのところにもぶら下げて、ああ、これで1日は、真冬ですから、何とか水ある

など、ということで、母親を寝かしつけて自分は横に座っていたわけです。いつの間にかうつらうつらしていたら何か御飯が炊けるにおいがしてくるね。腹が減ると人間というのはあさましいように見えるなと思っていたら、とんとんと肩をたたかれて、はっと振り返ったら、中学生ぐらいの女の子がどうぞとこんな紙皿に小さなおにぎりを4個のせて、食べてください。入り口のほうをぱっと見たら、高校生ぐらいのお兄ちゃんとお母さんが家から電気釜を持ってきたんでしょうね、お米と。そこで御飯を炊いて、中にいた7人ぐらいの人におにぎりをふるまってくれていた。電気というのがあるときすぐに元に復旧したんですけども、それが逆に言うと、あの大きな火災のもとなってしまったという悲しいことでもあるのですけれども、学校とか大きな建物はすぐ電気が戻っていたので、割と明るい中、あと避難していた人たちも生活ができて、気持ちの上では非常によかったんじゃないかなと思います。母親を起こして、食べようかなと2人で2個ずつおにぎりを食べました。ありがとうございますものの、ぱっと見たらもうお母さんたちはなくて、次、どこかに行かれたんでしょうね、きっと。自分の姿をぱっと見ると、この家の前でパジャマ姿のまま素足で立っていたはずの私が、黒いジャージを着ている。これどこでもらったんかいな、いつもらったんかいな。今でも幾ら考えてもどこでどなたにいただいたのか思い出せません。ありがたい話です。そのときにきっと寒そうにしていた私にくださったんだと思います。運動靴もあって、それは小さかったんでしょうね、靴ずれがして、何か血がついているな

というような感じで、そのときから私自身もいろんな方にサポートをしていただきました。そこが私の震災の一番初めの原点になっていくわけです。

その部屋には、避難している人というのは4日、5日たたなければ固定しないので、初めに若い御夫婦が入ってこられて、しばらくして会社の人がやってきて、おい、おまえ、尼崎の向こうのほうに、部長さんが転勤するんやったら向こうに社宅があるから行けへんかとかと話をして、奥さんと話をしていて、行こうかということで、きっと芦屋の社宅が潰れていたんで、お二人は転勤して、そこの社宅にすぐに行かれたと。私、おじいちゃんとお孫さんとそのお母さん、娘さんと3人がおられて、何か話をしていたら、しばらくすると大阪のホテルがとれたのでそちらに行きますとその3人の方は行かれました。その後にもまた4年生ぐらいの女の子とお母さんがやってきて、そうするとお父さんがやってきて、おい、泣くなよ、おまえの友達の誰々ちゃんが死んじゃったなと、悲しい話をしているわけです。そういう方もまたいなくなる。

夜になると、まるで幽霊のような御夫婦が入ってきました。そこ、あいていますかと言うから、どうぞと言うと、毛布を上からかぶったお二人がぱっと座って、たまたまそこの御主人と目が合っちゃったんです。そうしたら、こう言い出して、「おい、聞いてくれ。」その一言でどういう事柄かということはすぐわかって、私は慌てて正座をしました。膝の上に両手を置いてお話を聞き始めたんですけれども、「わしの娘と息子が何を悪いことした。」二十歳前後の娘さんと息子さんを一度に亡くされた方で、

小さいときに楽しく過ごした思い出話をずっとされるわけです。必死に聞くしかしようがないですね。つらかったですよ。それで、じっと聞いて、そうしたら、二十歳前後ですから、これからこんなことをしたいという夢があって、それもお父さんが語るわけです。横でそのお母さんは一点をじっと見たまま、すぐ近くの方がペットボトルを持ってきて、お水でもどうぞと言われてもうなずくだけでじっとしてはったですね。一回その話が終わったと思うと、また初めに戻って、恐らく私の記憶では3回は聞きました。エンドレステープのように。実際は4回、5回だったかもしれません。だけど、いつも僕はこの話をしながら思うのは、私はここで一言、つらかったと過去の言葉一言で済むわけです。けど、亡くなった方にとってみれば、自分が死ぬまでそれをしよっていかねばいけいけないという。私の母親はあんな家の中であったけれども助かった。その境目は何だろうなということをいつも考えてきました。

そういうふうなことがあって、2日の朝になったときに、弟が広島から車で駆けつけてくれまして、そのときもそうですね、元気にしとると、兄弟の会話でもああいうときはなかなか何をどういったらいいのかわからない、弟もどういう言葉をかけたらいいかわからんと無言で簡単な言葉で弟に母親を頼むなということで、母親は広島の方に行ったわけです。私は、身軽になったけれどもお金もないし、学校に連絡しようと思っても電話はない。公衆電話は二、三百メートル、人がずらっと並んで、みんな10円玉を握り締めて、たとえお金があっても電話はできなかったんだと思う

んですけども、自分の学校の様子はわからなかった。しょうがないから、私は職員室に行きました、学校の様子はどことも同じですから。そうすると教頭先生と若い女の先生が1人、三十五、六人の先生たちの中でその日は2人しか来られていなかったです。女の先生が小さい電気ストーブに当たりながら電話の番をしていたら、教頭先生がやってきて、ぶちっと線を抜いて、「おまえは何してる」、避難している人が寒い思いをしとるんや。勝手なことをするなとすごく叱責されました。女の先生はごめんなさいと泣いていたんですけども、厳しい教頭先生ともそれからしばらくはおつき合いするわけですけども、やっぱりすごいなというふうに思ったんです。

しばらくして、お昼前になったときに2日目、私もすることがありませんので、学校の門の前に行くときよろきよろきとしている人がたくさんいるんです。何か学校に用事があるって、遺体の安置所にもなっていたわけで、二十数体の遺体が安置されていたわけですけども、きっと職員室に何か用事があるんだろうなと思うので、私は暇でしょうがなかったですから案内をしていたわけです。そうすると、ぱっと廊下に行ってみると、こちらのほうから頭をぐるぐるに包帯を巻いた年配の方が息子さんに肩をかりて、左手は骨折して何か添え木をしていました。すごい姿で歩いていく。すぐわかりました、校長先生やな。それで、入ろうと思ったら教頭先生が出てこられて、僕の目の前四、五メートルのところでの会話ですね。いまだに忘れないですけども、校長先生が泣きながら済まんと言。そうすると、教頭先生は校長先生に向かって、も

う帰ってください、ここは私がしっかりやっておきますから。校長先生は、頼んだと。ただそれだけの短い会話なんですけれども、非常に僕にとっては印象的であり、それからの自分が仕事をしていく上でのいろんな指針にもなったわけです。そこで、校長先生が帰っていかれて、教頭先生に来た人を案内したりしていて、管理職のすごさというのをそこで分かりました。落ちついたときに、教頭先生が、まあ、お茶でも飲んでと言われて、僕は座って、お茶をごちそうになったときに、教頭先生が、実はわしの嫁さんも腰の骨を折って病院に入院しているんやということをぼろっと言われたんです。僕は神戸の教師だということを名乗っておりますので、怪しいものじゃないということで、「明日、見舞いに行っておいでよ、三、四時間だったら私が何とか頑張っでここで先生のかわりをしとくからね」という話をしたんですけども、いや、そういうわけにいかんなということで、その話は立ち消えになってしまったわけです。

2日目の夜になると、部屋があいているところに非常ににぎやかな7人ほどのクリーニング屋のおじさんたちが入ってきて、非常にダンディーでおもしろい方だったんですけども、座るなり、もうおれのところはクリーニング屋やっていたんやけども、下の店も上の家も全部潰れて、もうえらいことやねん。明日からどないして食っていこうと思うねんという話をされるわけです。それで、僕に、あんたの仕事は何やと聞かれたから、私、神戸の教師ですと言ったら、一言、よろしゅうおまんと言われたんです。お分かりですよ。先生というのは家が潰れても給料はちゃんと入って

くるし、悪いことをしなければちゃんと退職金を退職するときにもらえるし、商売されている方は潰れちゃったらゼロから出発するということで、私も分かったので、17日というのは教師たちにとっては給料日なんです。私ももう冗談半分に、僕の給料は職員室の金庫に眠っているねんとかいうふうなことで返したんですけれども、やっぱりその一言というのも大きかったですね、非常に。その方は5年たってから私は風の便りにお店を新築、やり直しをされたということで、花束を持っておうちまで行きました。息子さんがお店をやっておられて呼んでもらって、おっちゃんが出てきて、「あのときはね・・・」と私が今のような話をしたら、「わし、そんな失礼なこと言うたかな」とかいうことで、非常にうれしかったですね。そのとき、わずか10分ぐらいの立ち話でしたけど、自分にとってすごく大切なそういう本当に大変な時期だったんですけれども、大切なことを一つ教えてもらえたというふうな人でした。

避難所の生活と運営

3日目になったときに、2日目の晩に弟の友達が尼崎にいまして、その友達には自転車とヘルメットを何とかしてと言っていたら、ぼろぼろの自転車が届きまして、「持ってきたよ」と、ママちゃりですね。前にかごがあって、それにヘルメットがあり、ありがとうと言った後に、「ちょっと悪いけどな、1,000円ほど小銭くれへんか」と、いまだにその借金を返していないんですけれども、小銭をいっぱいもらって、3日目の朝に学校に早く行きたかったのです。芦屋市に僕は住んでいて、ちょう

どこの真ん中あたりが私が勤めている学校だったんです。ですから、震源地の淡路島の北淡町により近いから、もっともっとひどいだろうと思って、子供が何人かぐらい死んでいるのと違うかなというふうなことをずっと思っていたから、早く学校へ行きたかった。

3日目の朝の食事、食パン1切れとウーロン茶1缶もらって、これを食べてしまったら次いつ食事にありつけるかわからんということで、大事にそれは前かごに入れて、約5時間ちょっとかかって神戸の荒田小学校というところ、荒田というところは福原に近く、男社会の中で福原という色町なんですけども、そこにくっついている下町の小さな学校だったんです、兵庫区というところにありまして。先ほどの映像にあったようなところは、市役所の半分が潰れているところがあったりとか、いろんなところを通りながら、何せ悲しくてほろほろ涙を流しながら自転車をこいで学校に着いたわけです。学校に着いて一番初めに聞いたことは、教頭先生に子供はと聞いたら、全員無事やと。それから、家族の人たちもみんな亡くなった人はいない。ほっとしました、本当。うれしいというよりも、今まで本当に誰か死んでいるのと違うかなというふうなことが肩に乗っかかっていたのが、亡くなった子供がいなかったことを聞いたときに、本当に肩の荷がおりたという感じでした、本当に。そして、友達が、おまえも死んだと思っていたよ。私、大して真面目でもないんですけど、何か自分が不在するときとか、いろんなときは学校へ一本電話は必ず入れていたので、一切連絡が来ないということで、おまえ死んだんと違うかと

思っていたという話なんです。仲間が、
「田村、ここは今は学校じゃなくて避難所
になっているから、ちょっと見とってな」
と言うから、私はすぐに自分の担当の1年
の教室に行きました。そうすると、机や椅子
は全部運動場に放り出されて、運動会用
のテントを立てて、そこに子供たちの机や
椅子が積み重ねられていて、1年の教室に
行ったら、二十数人の人たちが毛布を敷い
たり布団を持ってきたりしながら、昔から
よくいう、起きて半畳、寝て1畳という本
当に狭いスペースを使っている、下に大人
ばかりおるわけです。2年生、3年生、4
年生、5年生、6年生、子供の数はわずか
205人で、どのクラスも1クラスずつ、
どの学年も1つずつの小さな学校だったん
です。どの学年の教室もみんな同じ、音楽
室に行っても、楽器を横へやって、人がい
る。図工室に行ったら、図工の大きなテー
ブルの上に寝ている人がいるとか、家庭科
室に行くと、衣類の物資がたくさんそこに
入っているとか。体育館に行くと、やはり
大阪なんかも同じだと思うけど、人口が多
いところは、わっと来ると、整然というよ
りも、ただ道がふらっとなついていて、みん
な勝手にわっと入って、後で何となく微調
整をしてすみ分けているという、こういう
雰囲気です。この映像が私が勤めていた隣
の学校で、ほぼこれと変わらない状態です。
こういう状態を見て、ああ、すごいなと思
って、205人ほどの子供しかいない学校
に800人の避難者が、子供たちの4倍の
人たちが来ていた。ここにおさまり切れな
い人たちは、パイプ椅子を持ってきた、職
員室の前とか、廊下にずっと並んでそこに
座って毛布をかぶっておられました。初め

の2日、3日の間はこのようでした。ここ
から僕自身は職員室の床が我が家になって、
通勤時間ゼロで、立ったら出勤で横になっ
たら我が家で寝ているという、そういう生
活が3月末まで続くわけです。

夜になって、ミーティングをするという
ことで、8時から。私たち10人ほどしか
先生がいなくて、初め4人来ていて、私
が行ってちょうど5人目になったんです。そ
の晩、聞いてもわからないのをじっと聞いて
いたら、次の日の準備とかいろんなこと
をずっと言いながら話をしている、一番
最後に、田村、何か気がついたことがあ
ったら言ってというから、私は3つ話をしま
した。

1つ目は、運動場に子供の机が4個置い
てあるんです。そこに二桁の番号を書いた
紙切れがぶら下げてあって、あれは何と聞
いたら、2日目の朝に地域の方が4人来ら
れて、抗議に来られたという。学校のおま
えらは何をしているということで。物資と
いうのは被災地にいろんなところから送ら
れてくるんやと。それをたまたま学校とい
う避難所に来たからといって、自分たちの
学校の中の避難をしている人たちだけで分
けているじゃないかと。おかしいというふ
うに来られたそうです。私の友達は、その
とおりでと謝ったら、言うとおりでろうと。
だけど、自分たちは必死の中でやっていて、
外がどうなっているかわからないと。どう
してほしいんやと聞くと、理由があって、
家が傾いていても避難所に行けないような
仲間がたくさん自分たちの周りにはいるん
だということで、4人のリーダーの人たち
は三十何人分とか、60人とか、28人と
か、それぞれ必要な数を言って、学校の中

で避難所に来た物資を配るときには、自分たちの地域のほうにもこの数だけ欲しいと。今、考えたらすてきだなと思います。何のマニュアルもなく、こういうふうに勉強も当時は誰もしてなかったわけです。けれども、やっぱり自分の周りの仲間たちを助けるために、学校に行って、きっちりそういうことを言って、それから、そこにかごにいろんなものを入れて置いておくんです。そうすると、台車を持ってきて、そこに入れては持って行って、また、そのかごを返しにくるという生活が1月半ぐらい続くわけです。ものすごくすてきだと思います。マニュアルがなくてもやっぱり仲間うちを捨てておけないということで、助けようという。

2つ目のことは、800人の人たちを先生5人でこんなの到底お世話し切れへんという話を言ったんです。そうすると、ちょうど1月末日ぐらいかな、班長会というのを予定しているんだと。教室を1つの班にして、全部で11か12ありましたか。体育館をああいいうところは3、3に分けて、9つの班に分けて、全部で21か22の班で班長会を開くんだということで、1日置きに班長会をそれから開いていくわけですけれども、そういうふうなことを話を聞いて、なるほどなと思いました。

3つ目に私が言ったのは、明日から運動場で喫茶店をやらせてくれ。何でやというふうな話を言うから、私は、ぐるっと回ったときに分かったのですが、元気な人や若い人たちは家族の者たちに何か食べさせるものはないとか、仕事の段取りとか、潰れかけていても家は大丈夫かなとかということで避難所から出ているわけです昼間は。

その間にいるのはシルバーエイジの人たちで、行き先、そんなにないな。うなだれた感じで毛布かぶったりして、本当にお地藏さんみたいにばっと点在しているわけです。私は先ほど話をしましたように、自分の周りでたくさん亡くなった人たちを見たりしていたので、避難所に来ているということは、無事に生きてそこまでたどり着いたわけで、このようなシルバーエイジの方を見て、絶対この命はなくしてほしくない。せっくなのに病気をしたり、風邪をひいたりとか、いろんなことで絶対に守らんとあかんという、そういう感じを持ったわけです。そのために外へ出て太陽に当たって、外の空気を吸って、たくさんの人が出てくれば茶飲み友達じゃないですけど会話が始まるわけです。何かそういうふうなことをしたいと。それで、仲間がそうしたらやったらどうということでオーケーが出て、何を使うかということ、僕は理科の担当をしていたので、理科室に行ったときに、そこに800人で分けられないものが置いてあったわけです。インスタントコーヒーのビンが3つあるとか、紅茶とか、グリーンティーのティーバッグが箱に入ったのが幾つかあったりとか、カルピスが置いてあったりとか、みそや塩、砂糖、しょうゆとか、それから、おかきの缶が2つ、3つとか、チョコレートの袋が幾つかということで、800人で分けることができないものがそこに置かれていたわけです。これを使ってやれるなと私は思ったので、そういうことを言ったわけです。

この話は後ほどまた作品を見ていただくとと思うので、最後に、その中に子供たちが避難している子供たち、これが一つ、つ

くっている子供たちです、みんな、避難している子供たち。ウエーター、ウエートレスたちが注文を聞いて戻ってきたところです。次は、こういうテーブルのところでお年寄りたちが出てきて食べているところには注文を受けたものを持っていく。また後でもうちょっと詳しいことは、神戸学院の学生たちと一緒に作り上げた作品があって、その中でも見ていただけたと思いますので、これ以上の説明はしません。

この子供たちはその後、初日の晩に届いたものを、おにぎりなんかを体育館で配っているんです。すさまじい役目を果たしてくれた子供たちとか、2日目に大人がやらへんのには子供たちがトイレ掃除をしたこととか、それから、6年生の子供たちが新聞をつくったこと。避難している子供たちが活躍したあたりは、後の作品の中に全部出てくると思いますので、話はここまでにしておきたいと思います。

それから、ボランティア元年というふうには当時は言われたんですけども、たくさんの方々いろんな支援をしていただきました。非常にありがたかったです、本当に。けれども、ここで今から少しお話ししたいのは、避難をしている人たちが、自分たち同士で、本当に心身ともにぐちゃぐちゃになっている中で助け合ったというのをちょっとお話しさせていただきたいと思います。

視覚障害の方がおられて、全盲というんですかね。その方が、オギノさんという人が私のところに来て、「先生、おれ、マッサージのボランティアするねん。月、水、金、10時から12時までですから、みんなに放送してね、」と言うから放送すると、たくさんの申し込みがあって、大学ノート

に予約をいっぱい書きました。その方は、奥さんと二人で避難していたわけですが、1月半ぐらいしてからうちのほうに帰られて、それまでの間ずっとマッサージのボランティアを図書室の隅っこのほうでされておりました。

それから、学校の近くに障害者の作業所がありまして、そこでは、はがきをつくっていたんですけども、2年生の子供たちが大きな牛乳パックを持っていつも勉強に出かけていてよく知っていたんです。そこに車椅子のリーダーの方が、いつも子供らが持ってきてくれて世話になっているから、何かせんとあかんなということで、800人の人たちに焼き芋を運動場で焼いて、その方たちとか、障害者の人5人と、それから、サポートしている女の方が3人で来られて、2度も寒い中、おいしい焼き芋をつくってくれたり、振る舞われたことを覚えています。

それから、今でも忘れないおばちゃんたちというお話をちょっとします、おばちゃんパワーというのを。私と同年代の当時53歳ですから、おばちゃんたちがたくさんいまして、私は非常に便利な、便利というのはおかしいですけど、やっぱり人間の心というのは、気持ちというのはやっぱりだんだん緩んできます。初め私はおばちゃんたちとかいろんな方と話をするとき、先生なんかどうせ被災してないから、家が傾いたり、部分損壊くらいだろうなという感じで話をしてくるわけです。私らはもう潰れて行くところがない。たまたま僕が、俺のところの家も潰れて何もないから、職員室で寝ているねんどか言って話を、うそやと思うんやったら、夜来てみとかい

う話をして、そうすると、同じ仲間なんですよね。家がなくなった仲間。態度がころっと変わるんです。僕はそういう立場を利用すると言ったらおかしいけど使ったらいと思ったのは、他の先生たちには心の何か下にあるようなものを話はしないんだけど、僕にだったらしてくれるので、細かい話をしていこうと思って、自分の家がなくなったことを、逆に言うと同じだということ দিয়ে いっぱい話をしたんです。

おばちゃんたちがやってきて、先生、知っとるかというから、何と聞いたら、地震から1週間から10日ほどしてから、夕食にコンビニ弁当が配られるようになってきました、ぼちぼち。コンビニ弁当といったって、神戸のあたり、全部潰れているわけですから、恐らく西は姫路とか岡山とか、東は京都とか、滋賀とか、ひょっとしたら名古屋ぐらいかもしれませんけども運んでくるわけです。冷え冷えのカチカチです。チンする道具も何もありません。おまけに昔のコンビニ弁当は今みたいに種類が豊富ではありませんから、脂っこい唐揚げとか、それから、魚のフライとか煮つけとか、味つけも濃いですよね、昔は。そんなのに野菜が入っている程度という。お年寄りがおなかがすいているねんけど、半分くらい食べて、後は残しているんやでと教えてくれました。私は一緒に食べていませんからわかりませんよね。何とかしたいんやと。お年寄りをあのままにしておくのは自分たちの恥やと言いました。同じ町の中で生活している人生の先輩、苦しいままで放っておくのは私たちの恥や。それで、どうしたいんやと聞いたら、せめて何か汁物でもつくりたい。ということで、一緒にそれから動い

ていったわけです。そのときに、数日前に曹洞宗のお坊さんたちが炊き出しに来てくれて、ドラム缶を半分に切って、それで火の口をこう切り取ったのが、すのこが置いてあって、それに鍋をのせて炊き出しをしていってくれたんです。帰るときに、私はふだんは、もう全然そんな物欲もあんまりあつかましくもないんですけど、あの時はかなりあつかましかったです。お坊さんに2つ置いていってと言ったら、若いお坊さんがいいよと言って、2つ置いていってくれたわけです。おばちゃんにこれがあるしということで、次に給食室に行って、給食をつくる大きな鍋を2つかついできて半分に切ったドラム缶に乗せて、ここまでできたなと言いました。次に、理科室に行って、調味料、塩とか、しょうゆ、みそとか、そういうものがあるを見せて、こんなのあるでと。そこまではいいけど、中身がないなという話になって、中身ができたらいいなにな、中身ができたなら始めようかで、その場は終わりました。その日の晩に9時前です。PTAの会長さんたちが、現職の会長さん、その前、その前、その前と4人が毎晩9時過ぎから11時ぐらいまで避難所にやってきてくれたんです。結構下町でめっちゃなことを言う人もいたし、そういうことが気になっていたわけです。PTAの会長さんたちが毎晩来られて、先生らの手に負えんことがあったら言うてな。わしらが何とかするからということで。その晩来られたときに、その中にトミナガさんという豆腐屋の御主人がいたので、トミナガさん、豆腐を何とかしてと言ったら、先生、ひどいな、わしのところの店は潰れとるやろうというから、わかっとるけども、

トミナガさんの顔で何とか豆腐を集められへんと、さっきもその話を、おばちゃんたちの話をして、あかん、そんなの無理やということで晩は終わったんです。次の日、職員室で私が仕事をしていたら、運動場のほうからトミナガさんが、先生、豆腐を置いていくねと言うから、ありがとうと、仕事の切りがついて、1時間ぐらいして、運動場の手洗い場に行きました。すると、バケツが8個ほど並んでいて、豆腐がぷかぷか浮いているわけです。やったと思って、体育館まで走って行って、おばちゃんたち2人に豆腐が来たで。それを見たおばちゃんたち、やれるなということで、あと、仲間を4人足して6人のおばちゃんたちが始めました。始めるといっても、豆腐を切るだけですよね、その日は。初めての汁物がその日に振る舞われたんです。そのときに、私がうれしかったのは、いつもだったら弁当をもらったらもう片手でぶら下げてさっとみんな自分の寝床まで行くわけですけども、その日は汁物があるから、こんな発泡スチロールのようなおわんがあるでしょう。あんなのを持って、片一方に弁当を持って帰っていくわけです。そのときの表情が本当に温かいなという、本当に汁があったからです。湯気が出ていて、それを見たときの皆さんの表情というのが何か和らぐというか、和らいだということか非常にうれしかったですね、本当に。言葉にするのが、出さなかったですけど。その日の後片づけをしながら、おばちゃんたちと1日豆腐はあったんやけれども、あと何もないから、1日だけやけどもしようがないなとかいうことで後片づけをしました。次の日、朝、起きて、また、その手洗いのあた

りを通ったら、大きなこんなビニールの袋に4つ野菜が入っていたんです。見たら大根とか、白菜が入っていて、それで、教頭先生や校長先生のところに行って、これは誰が買ったんですかと聞いたら、そんな金ない、買わへん。それで、私は、今の話、内緒ねということで、僕の責任においておばちゃんたちを呼んできて、こんなのが置いてあるから使おうかと。怒られたら私が責任をとって謝るからなということで、2日目は大根とか、白菜を入れたお汁ができました。終わった後、また後片づけをすると、お豆腐から始まって2つになったけども、もうないわなとか言って。3日目にまた同じ、ふらっと行くと、今度はワカメがたくさん袋に入っているんです。それで、おばちゃんたちのところに行って、変やで、神さんのいたずらやな、これとか言いながら、黙って使おうかといって、また、ワカメのお汁を3日目したんです。そうやってくると、私自身がいじましいですね。4日は朝早くから起きて、そこに行っても何かないかという感じで、ああ、ないな。8時ぐらいに見て、また1時間ぐらいしたら9時ぐらいに見てないな。10時、11時、何もないんです。お昼を食べてしばらくすると、田村さん、お客さんが来ているよというから、運動場へ出ていってみると、軽トラが入っていて、野菜をいっぱい積んであるんです。若い人が2人おりてきて、自分たちは神戸の北側の三田市、農業をやっている者です。これを使ってくださいと言われて、ありがとうと。それで、ポケットから5万円ばかり、募金して集めましたから使ってくださいということで、お礼を言って、その時にはっと気がついたのは、三田

の2人の若いお兄さんたちは、荒田小学校の避難所で炊き出しをやっているということを知っているから野菜を持ってきたんですよ。そんなの何もしていないところに野菜を持っていったって邪魔になるだけですよ。どこからどういうふうに伝わったのか。僕ら別にそういうことを吹聴したり、何か言ったことは一切なかったわけで、校長先生にその話をして、その日はまた野菜たっぷりの汁物をして、そのお金をそれからいろんなものを買って使おうかということで、班長会がもう動いていましたので、班長さんにもその旨を話して、オーケーをもらって、5万円くらいで3月の初めくらいまで汁物が続いていた。非常に何か私にとったら今でも思うのは不思議な、神さんが本当にいたずらみたいな話になるわけですけども、おばちゃんたちの熱い気持ちというんですか、自分らの先輩の年寄りをそんな惨めな思いをさせたくないという、何かそういう思いが口コミという形で広がって行って、今、言ったようなものになって、いろんな方々がそれを支えてくれたという、何か非常に今、思ってもすてきな話だなというふうに思います。

次は、初め立ち上がらなかった班長会の事です。班長さんたち、学校の先生たちがやっていて、自分たちは見ていたわけですけども、班長会が始まると、やっぱりすごかったです。一個ずつ自分たちで何をしたらいいかということ、みんなにどういうことを聞いてきたらいいか、聞いたことを集めて、なぜこういうことを言うかということ、僕はいろんなところで自治会なんかで話に行ったときに、災害の前に自分たちが知っておく一番大切なことは何ですかと聞

かれるんです。必ず私が言ったのは、自治能力を高めなさいという一言だけです。それはやっぱり今の方たちの悪口を言うんじゃないですけども、先ほど言ったように、やっぱり色町の近くということで、自治的に自分たちが何か話し合って、みんなに返して、意見をもらって、試行錯誤しながら進んでいくという経験が非常に少なかったんです、その方たちは。あごで使う人、使われる人という、そういう関係でかなりいろんな子供たちもそうでしたけれども、非常にそういうのが色濃く残っていたわけです。ですから、私たちもいろんなところをサポートしていたわけですけども、みんな考えてだんだん進んでいきました。2月27日、私は職員室の床でうとうとともう12時くらいですか、寝に入ったところに、先生、コピーを借りるねという班長の代表のマエダさんという方が来て、どうぞとか言って私は寝ていたら、5枚、10枚、15枚、20枚とえらい多いな、30枚、はっと起きて、マエダさん何するのと聞いて、ぱっとコピーのでき上がったものを見ると、ただ1本線が書いてあった、真横に線が書いてあって、署名を集めるための用紙をつくっていたんです。これをどうするのと言ったら、今から署名を集めてくるねんと言うから、何の署名と僕が聞いたら、ボランティア医師団継続要請の事です。二、三時間前に荒田小学校の避難所には東京の慈恵医科大学の医者たちが東京からわざわざ交代で2人体制で医療ボランティアで来てくれていたわけです。たまたま私のおやじも医者で、その慈恵医大の多分卒業生だったので、非常に愛着があって、その医者たちとは仲よくしていたんですけども、

その医者たちに聞いたのは、2月をもって、ボランティア医師団は阪神淡路の地域から全部撤退しなさいと。阪神淡路の医者たちがもうからへんのやと。当時の文部省と厚生省、今の厚生労働省とか文部科学省ですね、そこからの通達で神戸市としてはしようがないからということで、医師団たちにずっと申し渡したわけです。それを聞いて自分たちはこれはあかんということで始めたわけで、私たちも聞いていなくて、次の日に聞くわけですが、どうするのと言ったら、今から行くと。それから、明け方までずっと帰ってこなかったです。私がしたことは、絶対に成功させんとあかんと思ったので、私の大学の先輩が神戸新聞の明石の支局長をやっていたんです。それで、電話したらどうかなと思ったら、たまたまその日、泊まりで出てくれまして、夜中に。先輩、済まんけど、こんな事情やから、あした新聞記者、神戸の兵庫の区役所によこしてと言ったら、わかったとのこと。私の東京にいるところが朝日新聞の何か当時部長さんか、何かえらいさんで、家へ電話したら北海道に出張というから、ホテルまで電話して、真夜中にたたき起こして、朝日というのは大阪のこっちと東京の向こうとは一応別会社になっているようですが、つながりはあるようで、何とかならんかと言ったら、わかった、明日そんなら行かせるということで、次の日に二人の記者さんたちを行かせることになり、僕のほうは段取りをとりました。帰ってきてどうやったら、300人ぐらいの署名を集めてきました。慈恵医大の人たちは、荒田の避難所だけじゃなくて、すぐ近くに何とか福祉センターとか、何か小さなところがたくさんあ

って、6つぐらいそこもかけ持ちでずっと回ってくれていたわけです。それで、次の日に私は一緒に区役所まで行きました。そうすると、区役所の担当者は困っているわけです。自分らが決めたことじゃなくて国から指示がきたことですから。その旨を話したら、すぐ市のほうに電話をして、しばらく待っていたら今度、市から国へ電話が行って、国から市へ返ってきて、市から区役所に返ってきて、四、五時間かかりましたかね。それで2月末というのは撤回すると、1カ月延長して3月末まではいいという。すごいことですよ。自分たちの学校の医師団だけじゃなくて、そのやった結果というのは、阪神淡路の被災した地域全体のボランティア医師団が、1カ月間延長して、そういうボランティア活動してもいいということをそこで得られたわけですよ。初めに立ち上がらなかった人たちが、自分たちの暮らしがどうしたらよくなるかなという努力をしながら、大人に対して言うのは失礼なんだけど、成長していったわけです。そのすばらしい姿を見せていただくことができた、そういうふうなすてきな思いも持っております。

前にきれいな絵があるんですけど、あれは何の絵かおわかりでしょうか。あの絵の中身じゃなくて、何に使われたものだと思いますか。1つの辺が90センチの正方形で、厚さが5センチのもともと真っ白なダンボールなんです、結構重たかったですけども。これは、恐らくあの震災のときにはここと芦屋市のどこかと2カ所しかなかったと思うんですけども、プライバシーを守るための、防御するためのつい立て、間仕切りですね、90センチで。プラスの形

とか、T字型とか、いろいろガムテープで張りつけて、お互いにしゃがんじゃうと見えないわけです。あのときつらかったです。僕も母親を弟が連れていった後に僕の横があいたら、知らない男の人があいていますかといって寝たんです。ぱんとこっちを向いたらお互いこんなところで顔が合うわけです、知らない者同士が。女の方なんかは特に大変だったと思いますけれども。その間仕切りなんです、これは。9月に役所が要らないものを取りにいくということで、出したときに慌てて3年生の子供に持っていくということで、全部で五十数枚写真を撮ったんです。これはヤマダエミちゃんという6年生の女の子が体育館で避難をしております、おばあちゃんと弟と3人で。その時にこれが配られて、エミちゃんはきっと真っ白の画面では寂しいなということで、非常に絵ごころのあった子だと思うんですけれども、自分の周りをこういうふうに飾っていったということです。これ自身意味があって、神戸の南京町があったりとか、後ろに山があったりとか、やっぱりもとの美しかった神戸に返ってほしいなという、そういう願いというのがこの中にあって、もう1枚、これは、同じくエミちゃんの部屋の間仕切りなんですけども、ユニコーンという頭に角のある馬なんですけども、樂園と書いてあるように、お花があったり、ちょうちょが飛んでいたりして、何かそういう心の安らぐような日常生活というものが早く戻ってほしいなという、きっとそういう願いだったと思います。こういうすてきなものを描いて、自分たちはそこで生活を始めたわけですが、周りのおっちゃんたちが、おまえ、うまいな、わしのところ

も描いてくれということで、五十数人が何かしら注文がきて、エミちゃん一人では大変だからということで、家から学校に通っている友達、女の子3人ぐらいが連日体育館にあがってきては何かリクエストに応えて一生懸命いろんなものを描いていました。なかなかすてきなものだったと思います。こういうのもああいいう大変な目に遭っている中でできたという、子供であつてもすばらしい気持ちの持ち主なんじゃないかなというふうに思います。私はこの2枚は年賀はがきに毎年使っています、勝手に。

語り部活動で学んだこと・今考えておくこと

最後に、今から私がそういう震災の体験とか、それから、こういうふうに語り部活動をしてきた中で学んだこととか、それから、今、考えていたらいんじゃないかなというふうな思いをお話します。

私は、専門家でも何でもありませんので、自分が体験したことを、見たこと、聞いたこと、したこと、そういうことを具体的に挙げながら、皆さんに考えていただければありがたいと思います。

私はいつも言うのは、こういう災害に関する防災とか減災というのは、熱心から今度は本気になってほしいということをいつも言ってきます。ごめんなさいね、失礼なことを言いましたけども、ここに来られた方たちは本当に熱心だから来られているわけで、その中でもう一步お互いに、本気な方もいらっしやると思うんですけども、仲間とかと一緒にやっていくわけです。例えば、住んでいる地域なんか、職場でも同じです。そういうときに熱心から本気になり

ましようということでもいつも言います。

具体的な例を幾つか言うんですけども、恥ずかしい話で、神戸市の僕は退職した後、教育委員会のスポーツ体育課というところに2年間いました。そこで僕が係長さんや課長さんに言ったことは、何も用意していないのはおかしいということでやり合ったことがあるのは、食べるものを置いてへん、自分たちのロッカーとか、机の下に。僕が言ったのは、あなたは、公務員というのはいざとなったときに自分の家の家族の確認も要るわけですけども、そうだったらサポートに回るほうでしょう。そうすると、昼前にああいう事態になったときに、昼、腹が減ったな、夕方まで我慢せんとあかん、泊まってやらなあかん、スーパーもコンビニもみんな市民が買いあさってしまって、何もなかったらどうするのと僕は言うたんですよ。腹が減ってサポートはできないやろうと。そこで何でここで皆さんが自分のところにそういう食べ物を3食とか5食、簡単な食べ物を何で置かへんねんと僕は言ったことがあるんです。そうしたら、やっぱり頭の切れる人は言われました、僕は腹立っているのは、組合との問題で困るんやと。仕事の上で食べるものだったら、役所がちゃんとそろえてそこに置けという。そうすると、そんなことをしたら、新聞やテレビで今度は市民から、何やねんと。自分ら震災のときに食うものを役所のお金で出すのかというふうな、僕にとっては言いわけにしか聞こえなかったんですけども、そういうことを言われました。残念な思いでした。今は知りませんよ、そのとき。それから僕は4年間次は神戸市の公民館のほうに勤めていて、その館長さん

と仲よくなって、そんな話をして、僕が買ってくるから置かせてねということで、来客用のテーブルの下に7人体制でその公民館が動いていたので、7人の5食分の食べ物と水はそこにセットさせてもらいました、勝手に。若い事務の男の人に、僕がやめるときに、自分らで食ったらあと増やしておきよとかというふうにして。やっぱりそこに本気はないと思います、ごめんなさいね、神戸市のことを悪口言って。やっぱり自分らがそういう立場に回るんだったら、当然、そういうことは、僕はあの言われた課長さんに何で腹が立つかといったら、役所の金で買われへん、組合からこんなの言うと言うんだったら、自分が率先して、わしはこうするねんど、おまえらもやれやというぐらいのことは言ってもいいんと違うかなというふうなことを思っていました。そんなのが僕はやっぱり本気になっていくんじゃないかなと。

東京の品川区の尾山台という小学校にお泊まりの子供たちの訓練があるから、晩、話をしてくれということで行きました、7時から話をしに。8時過ぎまで話をして、帰ろうと思ったらもう新幹線がなかったので、当時、寝台急行の銀河というのが東京発12時ぐらいですか、あったので、それで帰るから、せっかく旅費をくれているから、子供だけじゃなくて、お父さん、お母さんに話をしようと、30人ぐらい会議室のほうにいて、話をしようと思って校長先生を呼んだ。そうすると3人ほどシルバーエイジの人たちがやってきて、校長先生、この会話は何でんねんと。僕はすぐにわかったので、結局、PTAが自分たち地域の防災の担当者を見捨て、PTAだけが勝

手にこんなのをやっているじゃないかということが言いたかったんでしょうね。校長先生が困られていたので、僕が一番年上だったから言ったのは、ちょっと待ってください、いいですか、いるお父さん、お母さんたちにこの3人が誰かわかりますかと聞いたんです。知らない。それで、3人の方には、向こうにいる若い人たち、誰か知っている人がおりますかと聞いたらいけないというわけ。どっちにも知らんとして、避難所を運営するときに物資がやってきて、パワーのある若い人たちにいっぱい動いてもらうわけでしょうと。あなたたち3人が無責任に知らん人にこれどこに持っていかかわかれへんというときに、そういうことは頼めませんでしょうと。逆に若いお父さん、お母さんたち、知らんおじいちゃんたちからあれせえこれせえと言われたって、気よくできませんよねということで、やっぱりその辺、ふだんから一緒になって顔がわかって、一緒にいろんなことをしている間柄をつくりなさいよということを僕は口はばったかったけれども言いました。ここに集まったこれを第1回目の会にして、これから2回、3回、4回とそういう会をふやして行って、お互いが顔見知りになって、防災のことについて考えていってくださいねというふうなことを言ったことがあります。それもやっぱりシルバーエイジの人たちのことを言うようすけども、世話をする人というのは名誉職では決してありません、決して。そういうところを現職の若い人たちはお仕事があるから、なかなかそういうことをしたくてもできないから、ついつい私たちのほうに、仕事から手が離れた時間のある人がすることになるわけですけど

も、決してそれは名誉職ではないということを考えておかなければとてつもないことになっていっちゃうんじゃないかなということそういう場で話しに行って逆に私は学んで帰ってきました。

それから、昔、ニュースステーション、久米宏が司会をしているときに、東京の首都高の下に3万人分の何か毛布とか、いろんなものを収納するスペースをつくって備蓄していますという番組がありました。それを見ていたところ、どこかの課長さんがお話をして、それで、久米宏がありがとうございましたと。そうしたら、課長さんがそこで鍵をかけるわけです。そのときに私は鍵をかけるなとテーブルの前で叫んでいました。私の仲間たちにあれ見たよと言ったら、みんな同じことを言いました。鍵をかけてその鍵を自分が役所のどこかにぶら下げていて、いざというときに役に立たないでしょうということ。そうしたら、もう一步突っ込んで、そのときにすぐにそこがいざというときに活用できるような方法はないのかということをもう一步突っ込んで考えてほしいなということです。私が言っている熱心から本気になっていくというような話でもう一つ、潮岬の中学校、小学校に話に行ったときに串本からずっとあがっていった上のほうで、結構高いところですけど、そこに行ったときに、小学生に午前中話をして、昼から中学生に話をしたんですけど、幼稚園があつたりして、中学校の校長先生が終わった後、お茶を飲みながら、実はわしのところ、3年生の子供らは先生と一緒に月に1回、幼稚園に行かせているんやと話があつて、私、何のことかわからなかったのて聞いてみると、いざとい

うときに、小さな子供は大変やから、ペアをふだんからつくって、ちゃんと毎月遊んで、僕のペアのお兄ちゃんとか、お姉ちゃんとか、親御さんが迎えにくるまでの間、ペアで中学校までつれてくるという。これは島根から来られた方も同じようなことを言っておられました。小学生の1年生から上だったらいざとなればそこに危ないから座っておけとか、いろんな指示がああいうときでも聞くわけです。けれども幼稚園の子供たち、誰かがけがしちゃった。先生が1人けがしちゃった。もうパニックになると思うんです。そのときに、そういうのを統率できないということを中学校の先生たちが考えて、それだったら、ふだんから顔見知りになっていて、いざというときにまず、中学校のほうで安全確認をしましょうと。親御さんたちは下からずっと車で上がってくるのは大変な地形なんですよ。そんなことはやっぱりふだんから何か考えたときにそこまで行き着くという、そんなことはやっぱり自分たちのところに小学校、中学校、幼稚園しかないんだけども考えていくという。そんなことをそこで私は聞いて、ああ、なるほどな思いました。

それから、神戸市は、震災後、14年間かけて、神戸市内全部に防災福祉コミュニティというのを二百二十何ぼかつくり上げました。それができたときに、神戸新聞がアンケートをとって、防災福祉コミュニティというのが自分たちのところにあるのを知っていますかといったら、知っている人が60%、知らない人が40%。役所のほうもお金を出しますから、できたらそこに防災倉庫というのを1つか2つ置くわけです、プレハブ、スチールの。そこにトラン

シーバーとか、ヘルメットとか、いろんなものを、ボールとか、ジャッキとか、中に入れているわけですけども、それを知っていますかといったら、知っている人が30%で、70%が知らない、そういう記事が出たわけです。神戸市の前の市長さんが激怒されたそうです。そうですね。せっかく自分らがつくってきた、つくり方の中で形だけを整えてきたということです。それは。いざとなったら、知らなかったら、金をかけて、いろんな事柄をしてみても、いざとなったら役に立たないということ。だから、つくっていく過程で住民の人たちが、ああ、そうやな。お金はかけてくれたけども、やるのは自分らだからというふうなことで、次々と生まれてこなければいけなかったんでしょね、本当は。そのところが形だけにこだわってしまってもしょうがないなというところです。

それから、広川町というところに行ったときに、和歌山ですけども、稲むらの火ですか、私もお話をして、あとはずっと見学をしたんですけども、その係長さんが話しして、役所は金がないからなとかと言ってお茶を飲みながら話をしていたら、その方は、やっぱり金がないと言っておられないということで2つのことをされていました。

1つは、地域の防災の倉庫をつくっていくそうです。入れるものがなかなかない、お金がないから。その中で考えたのは一つで、廃車工場、車を廃棄、潰しちゃうところ、その知っているところに二、三件に頭を下げていって、タイヤ交換のジャッキというのがありますね。あれが要らなくなるわけですね、もう捨ててしまうときに。

それをくれというのでたくさんもらって、それぞれの地域の防災の倉庫の中に持っていく。それと同時に、そのジャッキは阪神淡路のときに結構役に立ったわけです。駐車場なんかでも車をとめていて、家が潰れたときに自分らでどうにもできへんとき、車のタイヤのジャッキを持ってこいとかいって、幾つかで上げて助けたという例もあるわけです。

もう一つは、車椅子の方だけじゃなくて、つえをついている方とか、いろんな方が移動に困難な場合に困るということで、この辺では見かけませんけれども、リヤカーというのがありますね。荷物を運ぶやつ。それが歩いていて、潰れて何か動かさんと放ったらかしているようなところに行ったら、お宅、要らんかったらもらえませんかとか。それを幾つかもらってきては、修理しなければ使えないわけですけども、その人の仲間うちが修理は任しておいてとかいって修理して、何か黄色か何かの色に塗って、防災の倉庫のところに順番に置いていく。だから、金がないといってばやいてもしようがないから、わし、そんなの今、頑張っているねんというような話も聞きました。

やっぱり本気になっていくというのは、いろんな場面で何か自分がそれぞれやっているところで最後まで突き詰めてまだできへんかなとか、これでいいんかなとかという、何かそういうことを繰り返して考えていって、できることを一つでも何か実行していくという、何かそんなことじゃないかなというふうに思います。

それから、2つ目は、やっぱりお互いの足元が違うので、自分の足元を見直してみることが大切だと思います。例を挙

げると、阪急六甲というところには八幡神社というのがあって、僕も防災の訓練はしょっちゅうあったらインターネットで調べてはやっていたら見にくいですけれども、1月中ごろに、寒いときに行ったら、消防署の方が来られていて、バケツリレーなんかが始まろうとしていて、ぱっと見たら私が当時68歳ぐらいでしたか、私より年下若い人2人ぐらいしかなくて、5年生ぐらいの男の子とお母さんぐらいしか。あと全部自分と同じか上ばかりで、消防署の方が、火がいつ消えるかわからへんから、あせらんでいいからゆっくりやりましょうねと、バケツリレーをやっているわけです。30人ぐらいですか、そこの理事長さんに人数はこんなに少ないんですかと聞いたら、いや、もうちょっとしたら来ます。その近くの小学校で今、ゲートボールの毎週の練習をやっているそうで、終わったら来ます。30分ぐらいしたら来られました、20人くらい。だけど、年齢は変わりません、同じような方たちが。それで、ゲートボールの道具を置いて一緒に加わったわけです。それで、わあ、大変やなと思って、あと、豚汁なんかをつくってごちそうになりながら話していたら、ふだんは違うんですよとのこと。ふだんは、阪急六甲というあたりは上に神戸大学があったりとか、甲南大学があったりして、下宿している学生たちが結構多いところなんです。下宿している人と、何かで約束をきつとしているんだと思います。それで、いざというときには必ず出てもらうということで、ふだんはそういう訓練とか、話し合いなんかの場にも学生たちが、例えば50人おればその中から代表は5人とか決まっていて、必ず交代で出

てはコミュニケーションをちゃんととっておくという。そういうことをふだんやっているんだけど、1月の中ごろでちょうど試験中か、試験前だったから、きょうは学生さんたちは来なくていいよということで来てもらわなかったんですという話をしたんです。自分らが高齢者ばかりが集まっているからといってぼやいてみたって何も始まらないわけで、そこへたまたま下宿の学生たちが多ければ多いということで、その学生たちの力をかりれないかなということをされたわけです。

それと同じことは神戸のポートアイランドでもあります。住宅がたくさん建っているんですけど、結構、高齢化していて、その中で、昔、震災前はコンテナのヤードがずっとあったんですけども潰れてしまって、4列ぐらいあったものを1列全部も退去しちゃって、そこを震災後に埋め立ててまた大学が4つ建っています、そこに。その大学生たち、昼間来ておりますよね。それで大学生たちのリーダーたちと話をして、自分たちが来ているときには、何かがあったときには、ここの大学がそのエリアとかを、ここの大学だからこのエリアとかというふうな何か話をしながら、いざとなったときに力をかしてもらおうとかということも、ここは最近はその話を聞きました。

それから、大阪と京都の間に城陽市というのがあるんです、僕も初めて行ったんですけども。そこで話をした後、その町の人に聞いてみたら、このあたりは住宅が点在しているというんです。大阪と結ぶ結構大きな道があって、建物が二、三十軒があって、その中で、道路に沿っていろんな会社、運送業があったりとか、何かをつくるとこ

ろがあったりとか、こういうふうに小さな工場がたくさんありました。その場合は、工場の人たちと話をして、何かあった場合にはそういうところでサポートをしてもらうとか、ふだんからお水を預けておいて家が潰れて水がなくなってもその水をもらえとか、いろんな支援の約束をしているというような話をされていました。そういうふうにそれぞれ住んでいるところは事情がいろいろ違うわけで、自分たちの中でいざというときにどういうふうにしたらいいかということは、その地域の実態に応じて足元を見直してもう一度考えられたらいいんじゃないかというふうなことを、防災の担当の方とか、自治会のところに行って私は話をします。

一番新しいことで私がちょっとびっくりしたことは、3カ月ほど前に、千葉県佐倉市の志津中学校という、全校生徒がすごく多くて八百何十人おったんです。その中学校に呼ばれて行ったんですけど、私は行ってびっくりして、ああ、自分の考えが全然違っていたなと思ったのは、初め、市民防災課の方から電話があって、その後、担当の防災会の会長さんが話を詰めていきますということでその方に何日かしてから連絡先が変わったんです。話をしたり、メールのやりとりをしている時に、中学生に話をしてくださいという。防災会の会長さんが、私に中学生に話をしてくれとどういうことかなと思って。いろいろと話をしたら、地域の方もその会には参加されるそうなのでということで、中学生が地域の防災活動に積極的に参加できるように考えているようなことがあったら言ってくださいねとか言われて、何かちょっと変だなと思って

行きました。行くと校長先生、教頭先生は何かしら冷たいです。普通は、学校に呼ばれたら校長先生が来たらお茶を飲んで御苦労さんとか、なかってもいいんですけど、常識的なつながりがあるんですけど、挨拶されたら校長室へ戻られて、私、会議室におるわけです。その後に教頭先生が来られて挨拶されました。その地域の方が傍にずっとおって、市民防災課の方もおられて、お昼前に行ったんですけども、お昼、お弁当をごちそうになっていて、子供たちは体育館に自分らの会場の設営をしとるわけです。それが終わったので、そこに行って話をするつもりでいたら、その会長さんが一番初めに話をされました。ええ、中学校の先生が誰か話をするのかなと思っていたのです。会長さんが言われた一言というのは、今日はあなたたちにお願ひがあるんですと言うんです。この町でふだんの昼間に地震のような災害が起こったときに、君らのお父さんやお母さんのような若い人たちはこの町にはほとんどいません。いるのはお年寄りやら小さい子ばかりです。そこで、この町の中で一番元気があって頑張れるのはあなたたちです。その時に、君たちは何ができるかとか、どうすればいいかと、そんなことを考えてほしいために今日は私を呼んで話をしてもらいますと言われました。ちょっと違うなと思って、ふだんと。それを聞いていたんで、中学校の例なんかも神戸であったのを幾つかずっと書いていたから、話はできたんですけども、そこで僕はある意味、中学校の校長先生、偉いなと思ったのは、地域から言われたとか、市民防災課から言われたということで1年、2年、3年の全校生を60分間、普通は授

業があるのに。その授業の時間を60分間地域の方に提供するわけです、私の話を聞くために。おまけに体育館の準備は自分たちでさせているわけでしょう。その校長先生のやっぱり英断というのか、やっぱりそれはすてきだなと思いました。普通なかなかそういうことを地域から言われたときに、時間外とか、場所外だったらそういう事柄はいろいろ協力してもらえるんですけども、勉強している時間中に、学校の中でと、すごいなあと思って。それで、後で話をしたりとか、また、神戸に帰ってきてそんな話をしていると、神戸でも何人かの人が言いました。それがこれからの新しい地域の防災のある一つの柱になっていくと違うかなということ。どことも高齢化の中で、ふだんは元気者はいない。高校生というのはそこから割とエリアが離れたところにみんな行っているわけです。中学生はその地域の中にいる子供たちです。危険とかいろんなことがあるんだけど、学校がどうするかとか、地域がどうするかとかというふうな形をやはり考えていくべきだろうなというふうなことをいろんな人は言っていて、私も大学の先生に話をしたら、なるほどなと。それで、出てきたことは、中学校の先生たちは、自分の英断だけでそういうことをやっていくのは大変しんどいことやということです。そのときに、文部科学省が例えば、防災についてこういうふうにして、学校ではこういうふうにしたら、中学校ではこうしたらいいだろうというふうな指針を出せば、割とやりやすいのになというふうなそんな話も聞きました。一つ何か新しい事柄がそういうところから起こっていくんじゃないだろうかなということです。

それから、本気とか、それから、熱心さを乗り越えるとかというのはそういうところから始めていっていけばいいんじゃないかなというふうに思います。

それから、防災のことはやっぱりいうと、もうしんどいと言われますね。防災、防災とそんなしんどいわと。日常生活とよりつながった形とか、つながった形でいろんなことをやっていけばもうちょっと肩の荷がおりて気楽な感じで活動できるんじゃないかなということをいろんな方たちが言われています。私が知っている地域の自主防災をやっている仲間たちのところに行くと、地域の地図をつくったりする。普通、小学校は小学校、中学校は中学校なんかで防災マップを自分らでつくるというけど、そこはどうやっているかといったら、シルバーの方たちと一緒にぐるっと回りながらつくっているわけです。一緒につくるということに意味があるのと違うかなということで、そういう活動を毎年新しいメンバーでやっているわけです。

それから、地域の餅つきも絶対に逃さないという。独居老人のところに神戸なんかだったら、お餅をついて年末なんかを持っていくというふうなことを、各小学校やるわけですが、そこに元気なシルバーの人が加わって、一緒になって自分らがついてという、そういう小学生ぐらいの子供たちとそういう人たちが地域の中で結びついていくということがあります。そういうものをふだんからつくっておく。そうすると、防災とかということで動くときに非常に動きやすくなるんじゃないかなということでやっています。

私の知っている人は、一番おもしろいこ

とをやったのは、訓練するからといったってなかなか集まってくれませんよね、みんな、大変な御苦労なんだけれども。それで、やったことは、夏休みに訓練するねんけど、このくそ暑いのによくするなと思ってその小学校に行ったんですよ。少年野球の子らが50人ぐらい練習やとるんです、向こうで。あと5分ぐらいでもう会が始まるのになと思っていました。そうしたら、そこには制服を着た担当の人たちが七、八人いるわけです。地域の方が五、六人しか見えていなくて。どうなるかなと思ったら、野球の練習がぱっと終わったら、子供らがわっと走ってきて、ぱっと並んで、そして、子供らにはお母さん、お世話に行く人は結構おられますね。お水持っていったりとかいろんなもの。お父さんでも、わしがやるねんということでコーチが10人ぐらいおるわけです。そういう人がぱっと来て、プールサイドにぱっと行ったときに、自分たちのポンプありますね、手動のポンプが、あれを教え始めたんです。消防団の方が。1、ここをあけて、2、ざあっと、それで、こうやって水をやると。プールの水を突っ込んでお母さんもお父さんも1回ずつやらせるんです、実際に。それで、子供ら順番にこっちのホース持てとか言われて、運動場に流すな、せっかくやから木にかけろとかいって。運動場の木に一生懸命かけて、次、交代とかというふうにしてやっています。ポンプ自身を動かすという作業は一番小さい作業ですが。訓練をするからと言っても来ないと言われているので、人のいるところに行っている。サッカーのチームのところにも行った人がいます。人のいるところに行って何かをするという、発想を

逆転させるという、必ずしも全部そんなのでできるわけじゃないんですけれども。訓練をするときに、やっぱりお任せということが一番いけないということで、私の友達が高校3年間ずっとやっていて、いつも手伝いに行くんですけれども、2年目から始めたことは何かといたら、4カ所ぐらいに違うことをやって、皆、それを回っていくわけです、順番に自分たちが。そのときに、こことこことここは消防署の人をお願いしている。ここは誰々、ここだけあけているから若い人に、自分たちでここ何をしたらいいか考えてなど。物の見事にそこに自分らこんなしたらいいと考えました。次の箇所はまた違う人がそこを受け持つとか、3年目は若い女の人、考えてねとか。そうすると、そこで責任を持って自分たちがそこで工夫をすれば、今までのお仕着せのものだけじゃなくて、そこに何か新しいものができてきます。一番子供たちも一緒にやっておもしろかったのは、実際に家の下敷きになったというのを小さな工夫でつくるわけです。空気の入るようなお人形さんありますね。あれをぱんぱんに置いて、それで、廃材を持ってきて、ブロックなんかをくくりつけて重くして置いていたらだんだんと潰れますね、人形は。それで、こんなところで子供たちにどないして助けるとかいう。それで、子供らが何かしたら棒切れとかあったら本当に、てこの応用じゃないですけど、入れて一生懸命やっとなるわけです、そういうこと、ああ、おまえうまいとかいう。そういうことを工夫してやって、子供たちと一緒に考えていくという、そんなことを考えついてやっているところもあります、お仕着せで勝手

にあるものを自分たちが行ってそこでこなして帰ってくるじゃなくて。こんなことを繰り返していく中で、さまざまな力というのがついていくんじゃないかなというふうに考えています。

次は、ちょっと挙手をお願いします。うちで非常持ち出しの袋とか、何かを用意されている方、ちょっと手を挙げてください。はい、ありがとうございます。僕が思うのは、阪神淡路のときに私は持っていなかったです。最近はちゃんと持っています。勧めるんですけれども、そのときに必ず言うことは一つ、それが持ち出せたら自分が生きているんやからラッキーと思っただけいいし、その中のものは、食べ物に関していうと、食べたり飲んだり使えたらそれにかけたお金はちゃんと戻ってきたわけです。無駄じゃなかったわけです。ことに自分に用がなくて、誰か困っていたらあげてもいいわけでしょう、それを。自分が持ち出せるかどうかとか、使えるかどうか全然わからないわけなんですけれども、お守り感覚で持ちましょうということを言います。お守りを持っているから受験が成功するとは限りませんね。私もたくさん失敗しましたが、でも、幾らお守りをたくさん持っておってもうまいこといかないし。お守りというのはある意味でそういう精神的な支えとか、そういうものになってくるわけですね。ですから、家にそういう非常持ち出しのものを、食べ物だけに限って話しますと、あるということはいいいことだと思います。それから、それを食べてしまったらいいですね、記念日をつくって。そうするとまたそこで入れて話が出てきていいんじゃないかなというふうに思います。

ちょっと最後に東日本の話を2つだけしてみたいと思います。

1つは、2月7、8日に南三陸から名取あたりまでずっと行ってきたんですけど、その中で、これはちょっと言葉にならないことを言います。海岸近くで盛り土をやって本当にずっと人がいなくて、土ばかりのところに行ったら丘があって、そこに鳥居がありまして、漁師さんたちはそこに登って、きょうは魚を取りに行こうか、やめとこうかという判断をする場所だったそうです。そこに石碑、石柱が4つあって、3つが向こうに落ちていて1個だけ残っていて、落ちているほうは何かなと思ってのぞきにいったらこんな言葉が書いていました。

『地震が起きたら津波が来るからすぐ逃げろ』。私はもう何も言えなかった。そこはたくさんの方が亡くなっているところなんです。それが落ちているんです。昭和3年の津波のときの話で、その次の行にどんなことが書いているかといったら、10尺の津波がやってきた。10尺というのは3メートルちょっとですか。そういうことが書いてあるのがどんと落ちているわけです。あれをあそこの方たちはこれから引き上げたときにどんな思いであれをどうするんだろうかなと思って私自身も言葉が今でも出ないです。

1時間ほど前に、少し離れたところで私たちは語り部の方の話を聞きました、向こうで。その方たちが言うには、ずっと上のほうにある中学校に逃げたんですよ。2階、3階に逃げた人は全員助かったけど、1階の人は助からなかった。私は、その傍まで行ったら、津波跡、コンクリートに筋が入っていますね、水がいったところまで。私

がこうやって見たら、その高さあるかないかです、3メートル。そうすると昭和3年のときの3メートルと同じようなものがやってきたわけでしょう。ということで、本当に言葉が出ないですけど、やっぱりそういう歴史の中に何か学ぶものというのは素直に学ばんとあかんねんというふうなことを私は感じました。

もう一つは、岩手県の野田村というところに7回ほど行ったんですけども、そこに保育所があって、67人の子供たちが全員助かって、先生10人も。余り有名な話じゃないんですけども、すごくすてきだったのは、海岸から300メートルぐらいのところにフラットな位置で海拔がほとんど1メートルから2メートルぐらいのところに保育所があって、そこから300メートル行ったところに野田の役場があって、そこから1キロずっと登っていったところに大きな赤い鳥居があって、その上にお宮さんがあるわけです。園長先生は、自分がそこに来てから職員の人たち、毎週1回避難訓練と、体力をつけるために子供を歩かせると。2歳のこんな小さい子がおるわけです。六十何人一生懸命、わっせわっせと毎週、何曜日か知りません。途中で行ったら役場があるからそこで一人職員が加わるかということで入って、それを1年間続けてきたわけです。津波の日も地震がいった後に、来る、さあ、逃げるよ。子供らに早歩きという言葉があるんですけど、早歩きしなさいと、わっせわっせ逃げて、その鳥居のところからしばらくずっと上がったところに鳥居のあたりまで津波がやってきて、全員何とか助かったと。園長先生もすごい執念だなと思うし、きっとそういうことを園長

先生は言ったときに職員の中には毎週、毎週そんな自分が歩くわけですけど、先生も。しんどくてやめとったらいいのにと思った方もきつといらっしやったとは思いますが、そのような中で、やっぱり園長先生自身はやはりこの子供らを守らんとあかんという、そういう意識があったんでしょう、それがやっぱり。そのお話を聞いたときに、4月だったらこの子らは全員死んでいます。体力がついていなくて、4月から3月までの間、せっせせっせと訓練したから、みんな体力アップしているから、歩く速さもずっと早くなったわけです。4月のまだ小さいころだったら恐らく死んでいたでしょうねというようなお話を聞きました。

おわりに

本日の結びとして、僕が最近聞いた言葉の中で皆さんも考えてほしいと思うのは、災いの国、覚悟をと。こういうスローガンをあげて、神戸新聞は阪神淡路から20年を迎えるために、自分たちはそのスローガンをあげてあらゆるところからいろんな記事を集めて、いろんなものをすばらしいものをつくってきました。僕はこの言葉をすごいなと思ったのは、やっぱり短い言葉ですけども、災いの国、火山が爆発したりとかいろんな事柄があるわけです。それから、覚悟をとという言葉、気をつけろではなくて腹をくくれという言葉ですね。やっぱり国は国、政治家は政治家として腹をくくって何かをなささい。地方自治体のリーダーの人たちはそれを考えなさい。地域の方、それから、家庭は家庭で災いに対して自分たちが腹をくくって家庭生活を考えなさい。

個人は個人でそういうものに出会ったとき、どうしたら命を守れるか、命を守るために自分たちが覚悟しなさいという、すごく重くて厳しい言葉だと思います。けども非常に私は好きで、こういうことをこれから語り部としてこんな話をしていくときにお話をしていきたいなというふうに考えております。

長い時間、どうも御静聴ありがとうございました。

～好きやねんこの街この家！ 守ろう安全 築こう安心～

発行 一般財団法人 大阪建築防災センター

〒540-0012 大阪府中央区谷町3丁目1番17号

TEL. 06-6943-7253 FAX. 06-6943-6740

<http://www.okbc.or.jp>